園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2026年6月

性格スキル（非認知能力）のビッグ・ファイブ

●保護者会へのご参加ありがとうございました。平日の夕方、のべ6日間にわたり開催させていただきました。こうして毎年多くの保護者様と直接顔を合わせお話させていただくことが、私たちにとって保護者さまと心の距離が近づき、保育や給食を提供する上での貴重な糧となっております。今年度は秋にもお子様の成長の様子を写真や動画を交えながらお伝えする懇談会を設ける予定ですのでどうぞご期待ください。

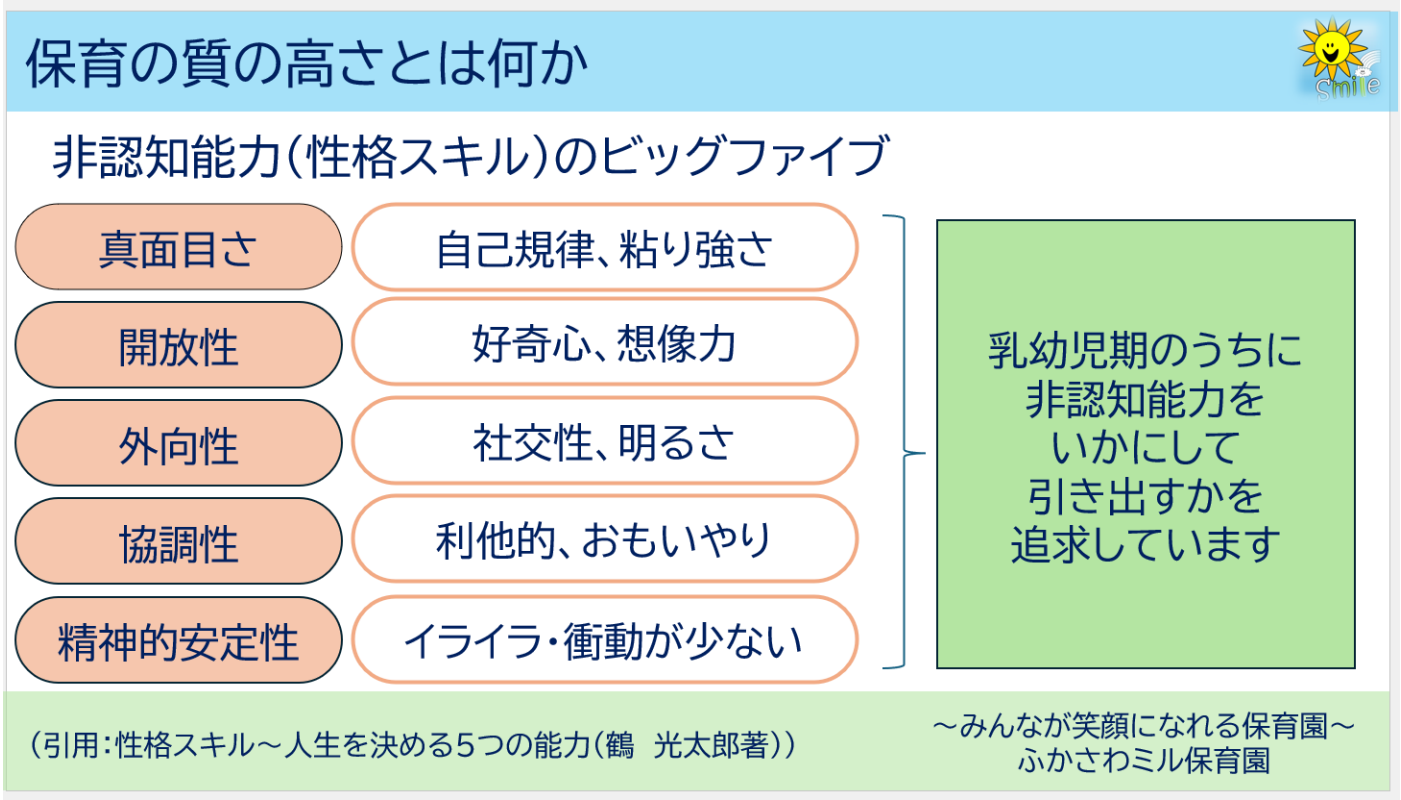
●さて、前回のコラムの中で、ジェームズ・ヘックマン氏の研究結果を取り上げ、乳幼児期段階での非認知能力を高める教育・保育の重要性について言及しました。そして保護者会で私からは、「**質の高い保育とは何か**」というテーマでお話し、「**安心・安全で心地よい物理的・人的環境が保障されているという土台の上で、子どもの非認知能力を引き出すための保育者の関わりが日々絶えず行われていること**」と述べさせていただきました。一口に「非認知能力」といっても、調べてみるとその定義や分類は多種多様で、また分類ごとに活躍する局面に違いがあるように思われます。

●そこで今回は、保護者会に引き続き非認知能力をテーマに、「性格スキル～人生を決める5つの能力～（鶴光太郎著）」という最近読んだ著書の中から、保護者会で時間の都合上ご紹介できなかった私が個人的に面白いなと思った内容について取り上げたいと思います。（幼児教育からは少しだけ話題が離れるかもしれませんが）

性格スキルのビック・ファイブ

●非認知能力は、最近では性格スキルと呼びかえられているそうです。非認知能力を単に遺伝的・先天的な資質ではなく、生涯を通じ

て伸ばすことができるスキルの一種と捉え直すことを意図しているようです。そして、保護者会で次のスライドでご紹介したように、性格スキルは最近ではヘックマンらによって「ビッグ・ファイブ」という5つのカテゴリーに分類されています。

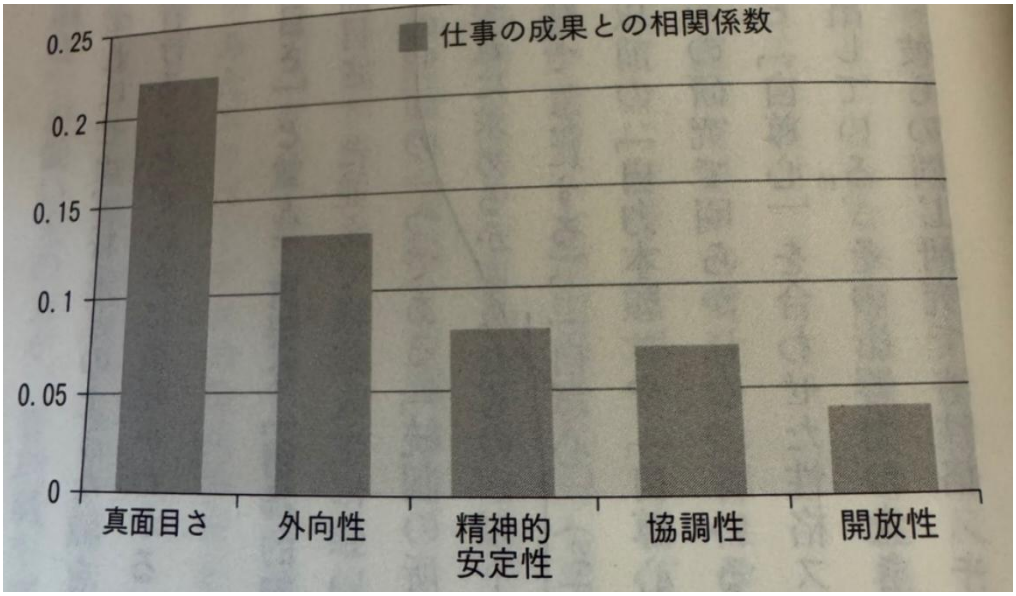


（注：ビッグ・ファイブの定義については近年 OECD から別カテゴリにて再構成されていますが、いったん本コラムでは同書の定義に従ってして解説します。）

●性格スキルは、学歴や仕事、健康や犯罪など幅広い人生のパフォーマンス、結果に影響を与えていたというのがヘックマンの研究結果でしたが、具体的にはそれぞれの結果にビッグ・ファイブのどの要素が影響を与えているのかについて更なる研究が行われています。

性格スキルと仕事の成果の関係

●次の図は、仕事の成果とビッグ・ファイブとの関係について行われてきた多くの研究をまとめて評価したメタ分析です。



●それぞれの因子と仕事の成果との相関係数をみると、「真面目さ」の0.22に対し「外向性」は0.13、「精神的安定性」は0.08、「協調性」は0.07、「開放性」は0.04となっており、関連の中では**「真面目さ」が一番高い**ことがわかります。

●また、この「真面目さ」は、仕事のジャンルにはあまり依存せず、広範な職業に影響を与えることも、この研究の中で明らかにされています。常識的に考えても、真面目さが役に立たない職業はそうそう思い当たらないですからね。

●一方、二番目に高い「**外向性**」（明るさや社交性）と仕事の成果との相関関係は、**職種によって異なる**ようです。例えば、学者、医師、弁護士等のプロフェッショナルの場合の相関はマイナスですが、管理職では0.18、営業職では0.15と高い数値が出ています。人との相互的な接触、交流、協調がより求められる職種ほど「外向性」が重要になってくることが、データ上に表れています。

●個人的に少し意外だったのが「**協調性**」の相関係数の低さについてです。疑問に思いながら読み進めていくと、「この結果は主にアメリカにおける研究に基づくもの」という記載を読んでなるほどと思いました。実際に大阪大学が実施した日本のアンケート調査とアメリカの調査結果を比較検証したところ、性格スキルの年間所得への

影響について、日本男性では年間所得に対し「協調性」が正の相関関係であるのに対し、アメリカ男性では負の相関関係になっていました。日本では「協調性」が人生でプラスに働くが、アメリカではマイナスに働いているという、和を重んじる日本人と個を重んじるアメリカ人の文化の違いを反映するような、興味深い結果です。

●仕事の成果との関係で「真面目さ」と並んで重要なものとして挙げられているのが「精神的安定性」、なかでも「統制の所在（責任感）」や「自己肯定感」です。例えばヘックマンの研究の中でも、「青年時の「統制の所在」と「自己肯定感」を合わせた性格スキルが高いほど、成人以降の賃金が高くなる」とされています。

●ビジネスの世界では（ビジネスに限った話ではないですが）時に正解の見えない局面、一時的には失敗に見えるような局面を走り抜けねばならない時があります。迷った時、心が弱くなった時も、決して他人のせいにせず、「自分なら絶対にできる」と楽観的な自信を持って粘り強くひたむきに走ることが、思いがけぬ成果に結びついたりします。途中で諦めてしまえば当然成果は得られません。個人的には、こういった心のしたたかさを表す「精神的安定性」は、外向性以上に相関が高くてもよいくらい重要ではないかと感じました。

性格スキルと寿命・健康の関係

●では、寿命等の健康面と性格スキルとの関係はどのようになっているでしょうか。過去の34ほどの研究をまとめて性格スキルと寿命の関係の強さを比較した研究によれば、「真面目さ」がビッグ・ファイブの中でも最も強い因子であることが分かりました。ちなみに、真面目さ以外では「開放性」「協調性」「精神的安定性」が高いほど寿命が長いという結果が出ているそうです。

性格スキルと犯罪の関係

●ミルの園児の将来にはよほど無縁の世界の話ですが、性格スキ

ルは、成人以後の犯罪確率にも影響を与えています。ある分析では、重大な非行を行った少年は、母親による12～13歳の頃の「真面目さ」と「協調性」の評価が、そうでない少年に比べかなり低いことが分かったそうです。被害者の気持ちを慮る「おもいやり」のような協調性と頑張りぬく「真面目さ」が幼児期に育まれていれば、それが犯罪の予防と抑止になることは容易に想像がつきます。

性格スキルと学歴・成績の関係

●次に学歴や成績と性格スキルの関係はどうでしょうか。まず学歴においては、ビッグ・ファイブ中でも「真面目さ」と「開放性」が教育年数との決定要因において重要であることがわかっています。また、成績においても、真面目さと GPA（学生の成績評価値）との相関が圧倒的に高く、次に高いのが「開放性」だということです。ここまであまり登場してこなかった「開放性」ですが、開放性の一番のファクターは「好奇心」であり、好奇心は学びの意欲の源泉ですので、成績や学歴と相関が高いことには非常に納得できます。

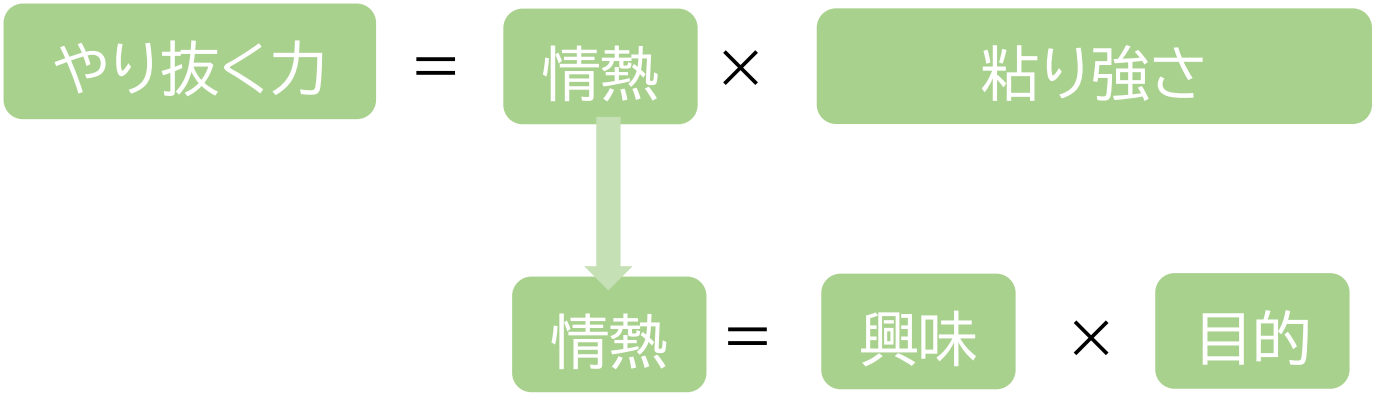
●以上、性格スキルのビッグ・ファイブのうちのどの要素がより良い人生を送るために必要かについて見てきました。このように「真面目さ」は、どの結果の分析においても登場しており、人生のどの側面でも真面目さは圧倒的に重要だということが分かります。

性格スキルにおける GRIT（やり抜く力）の位置づけ

●本書を読んでいて、ビッグ・ファイブの「真面目さ」と、以前の園長コラムでご紹介したアンジェラ・ダックワース氏の「GRIT（グリット）」の概念は、比較的近しい事を言っているのではないかと思っていましたが、実際に、その旨の記載（真面目さとやり抜く力はほぼ同義であるとの記載）が後段の方にありました。しかし、ダックワース氏のグリットの定義をよく見ると、「真面目さ」以外のビッグ・ファイブの

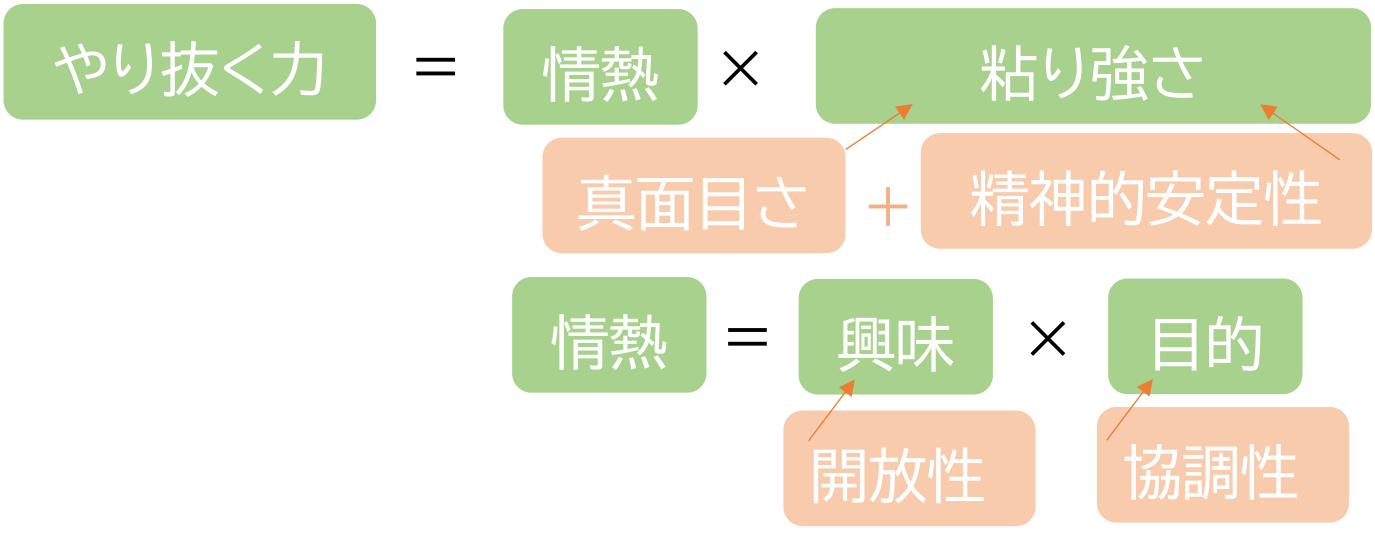
要素も複数関わっていることに気が付きました。

●ダックワース氏の定義するグリット＝やり抜く力の定義は、図解すると以下のとおりでした。



●ここでいう「粘り強さ」は、「**真面目さ**」の一側面であると同時に、先ほど述べたような、途中の困難にも決して諦めない、できる気しかしないといった「**精神的安定性**」も少なからず影響していると思われます。

●また、「興味」は「**開放性**」の一側面である「好奇心」と同じ意味ですし、「目的」も単に自分の利益のためにというだけでなく、より大きな「**人のために役に立ちたい**」という**利他的**な精神、「**協調性**」があってこそ、情熱の火は強く長く燃え続けます。



●このように、子どもに将来的にグリットの力を育みたいと思った場合、ビッグ・ファイブのうち真面目さが一番重要といっても、それ以外の要素についてもバランスよく育てる必要があることがわかります。

超一流の偉人の認知スキル・性格スキル

●ちなみに、私は幼少期から偉人の伝記を読むのが好きな子どもでした。ダックワース氏の著書「GRIT」の中に、偉人がその輝かしい業績を上げるうえで「やり抜く力」がいかに重要かを示すエピソードが紹介されていましたので、最後にそちらをご紹介したいと思います。内容はスタンフォード大学のキャサリン・コックス氏が 1926 年に発表したという、今からちょうど 100 年前の研究です。

●コックス氏は偉業を成し遂げた 301 名の歴史上の人物について、まずは略歴や伝記情報等を細かく調査し、幼年期の推定知能指数（IQ）を計算しました。
その結果、次の 2 点が明らかになりました。

①偉大な功績を収めた歴史上の人物たちは、一般の人々に比べ知能指数が高い（例：一般の人：100～110に対しジョン・スチュアート・ミル：**190**、ニュートン：**130**）
②偉大な功績を収めた歴史上の人物たちを功績の偉大さで比較すると、知能指数の高さはほとんど関係ない（功績が最も高いレベルでの平均：146、最も低いレベル：143）

●次にコックス氏らは対象者の67の性格的特徴を調べあげ、超一流の偉人（上位10名）と単なる偉人（下位10名）との決定的な相違点について、「動機の持続性」と名付け、以下の4つのポイントにまとめました。

＜超一流の偉人に共通する「**動機の持続性**」＞

●遠くの目標を視野に入れて努力している。

●いったん取り組んだことは気まぐれにやめない。気分転換に目新しさを求め新しいものに飛びつかない、粘り強さ。

●意志力の強さ。いったん目標を決めたら守り抜こうと心に誓っている

●障害にぶつかっても、あきらめずに取り組む辛抱強さ

●そしてコックス氏は「**知能のレベルは最高ではなくても、最大限の粘り強さを発揮して努力する人は、知能のレベルが最高であまり粘り強く努力しない人よりも、はるかに偉大な功績を収める**」と研究を締めくくっています。この研究結果は、偉大な業績を生み出す要諦は「**瞬発力**」よりも「**持久力**」なのだということを改めて教えてくれます。子どもに対し、イソップ童話の「うさぎとカメ」を読み聞かせする際も、こうしたエビデンスを知っているといないとでは、語り口にこもる熱が違いますよね。

園長　橋本　英明

＜追伸＞ 『誠』＝「実」＋「一」＋「久」

●私がこのコックスの研究内容を読んだ時にふと思い出したのが、吉田松陰の次の言葉です。

誠の一字、中庸尤も明らかに之れを洗発す。謹んで其の説を考ふるに、三大義あり。一に曰く「**実**」なり。二に曰く「**一**」なり。三に曰く「**久**」なり。

（意訳）

「誠」の一字については『中庸』の中ではっきりと真理を洗い出し、発揮されています。私なりにその意を煎じ詰めると**①実践②専一③継続**の3つ**（一つの事をひたむきに実行し続けること）**に凝縮されます。

●この言葉は、当時 24 歳だった松陰が萩藩主毛利敬親に四書五経の中庸を引用し上書したものですが、言いたいことは上述のコックス氏の結論と大方符合するのが面白いです。非認知能力の重要性は、古今東西を問わず覚者たちの手によって絶えず繰り返し語り継がれているようです。